

フードバンクの現状と活動促進に関する研究

1220545 福良佳那子

指導教員 林一夫

研究背景

近年日本では、本来食べられるのに捨てられてしまう「食品ロス」が多量に発生しており、深刻な問題となっている。一方、日本の生活困窮者世帯数は、高水準で飽和状態が続いている。この状況から食品ロスの低減と同時に、生活困窮者の支援を行う取り組みである「フードバンク」の役割が重要になってくる。筆者が、フードバンク活動に参加した際、多くのボランティア募集のポスターや食品提供量の少なさを目の当たりにしたことから、フードバンクの現状を調査し、活動の促進方法について検討した。

研究目的

本研究は、食品ロスとフードバンクの現状を認識し、課題を抽出したうえで、活動の促進方法を提案する。

調査・分析方法

食品ロスの現状とフードバンクの実態についての先行研究と実地調査を行い、フードバンクの現状を把握し、フードバンクを運営するうえでの課題の解決方法について考察し、提案する。

分析結果

毎年多量の食品ロスが発生しており、食品ロスの認識は高いにもかかわらず、企業や個人の食品提供者に、フードバンクが十分伝わっていないことが分かった。

また、フードバンクを運営していくうえで、食品の提供量とそれらをまかなうフードバンクスタッフやボランティアが不足していることが大きな課題であることが判明した。そこで、これらを解決するために新しい物流モデルを提案した。

考察・結論

フードバンクの存在を食品提供者に加え一般の人に周知させることが、食料提供品不足ならびにスタッフ不足を解決するための課題である。これを踏まえ、従来の配送先である福祉施設にフードバンク機能を設けるといふ新しい物流モデルを提案した。こうすることにより、食料提供品が廃棄物としてごみ収集場へ行かないようになり、発生している食品ロスを食料提供品としてフードバンクに供給することができる。また、ミニフードバンク化することで、生活貧困者の食品引き取り先がフードバンクと福祉施設へ分散されることで、より多くの生活貧困者に分配でき、フードバンクのスタッフ不足も解消することができる。